

# おぢや震災ミュージアム「ジュニアサポーターズクラブ」の特徴から見る震災伝承施設の役割と可能性

## Roles and Possibilities of Disaster Memorial Facilities Observed in Activities of the Junior Supporters Club in Ojiya Earthquake Disaster Museum

○山崎麻里子<sup>1</sup>, 佐藤翔輔<sup>2</sup>, 松本勝男<sup>1</sup>, 赤塚雅之<sup>1</sup>, 細貝悠人<sup>3</sup>, 和田恵子<sup>4</sup>  
 Mariko YAMAZAKI<sup>1</sup>, Shosuke SATO<sup>2</sup>, Katsuo MATSUMOTO<sup>1</sup>,  
 Masayuki AKATSUKA<sup>1</sup>, Yuto HOSOKASI<sup>3</sup> and Keiko WADA<sup>4</sup>

- <sup>1</sup> 公益社団法人中越防災安全推進機構  
 Chuetsu Organization for Safe and Secure Society
- <sup>2</sup> 東北大学災害科学国際研究所  
 International Research Institute for Disaster Science
- <sup>3</sup> 静岡県地震防災センター  
 Shizuoka Prefectural Earthquake Preparedness Education Center
- <sup>4</sup> 一般財団法人小千谷市産業開発センター  
 Ojiya Industrial Development Center

Ojiya Earthquake Disaster Museum, opened in October 2011, provides disaster prevention training programs using the findings and lessons learned from the Chuetsu Earthquake. The facility runs the Junior Supporters Club consisting of elementary school student members living in the vicinity. The members are not only regarded as visitors after school, but also encouraged to visit the museum by committing management or having roles at special occasions. This paper examines the roles and possibilities of disaster relief facilities by revealing students' motivations, learnings and changes through an interview survey.

**Key Words :** Chuetsu earthquake, disaster lore facility, Junior Supporter, SONAEKAN

### 1. はじめに

平成 16 年 10 月に発生した新潟県中越大地震（以下、中越地震）の被災地において、震災の経験・知見・教訓を後世に伝承するために整備された「中越メモリアル回廊」（平成 23 年 10 月オープン）のオープンから 6 年が経過した。整備された 4 施設 3 メモリアルパークではそれぞれに来館者の傾向に特徴が見え始めてきた。

各施設では、展示やコンセプトの特徴を生かし、それぞれに異なる来館者に向けた企画、運営を行っている。

特に、新潟県小千谷市に整備された「おぢや震災ミュージアムそなえ館」（以下、そなえ館）では、中越地震の知見・教訓を生かした防災学習研修施設として防災研修プログラムを提供し、県内外の各種団体から利用されている。また、近隣に住む小学生を中心とした「ジュニアサポーターズクラブ」を設置し、放課後や休日等、子どもたちの積極的な来館につなげている。

そこで本稿では、ジュニアサポーターと呼ばれる子どもたちのそなえ館来館の動機や、来館することで得られた学び、子どもたちの変化をインタビューの中から探り、災害伝承施設が果たす役割りと可能性について考察する。

### 2. 中越メモリアル回廊の概要

中越メモリアル回廊とは、「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」「おぢや震災ミュージアムそなえ館」「川口きずな館」「やまこし復興交流館おらたる」の 4 つの施設及び、「震災メモリアルパーク」「妙見メモリアルパーク」「木籠メモリアルパーク」の 3 公園の総称である。中越地震の被災地全体をアーカイブし、知見・教訓、支援に対する感謝の気持ちを伝え、恩返しをするため、防災研修、防災学習、持続可能な地域づくりの拠点としてその役割を果たしている。

平成 23 年 10 月にきおくみらい、そなえ館、川口きずな館がオープン。その 2 年後の平成 25 年 10 月におらたるがオープンしてグランドオープンとなった。4 館合計で年間約 8 万人の来場者があり、平成 30 年 7 月には 4 館累計来館者数が 50 万人を達成する見込みとなっている。

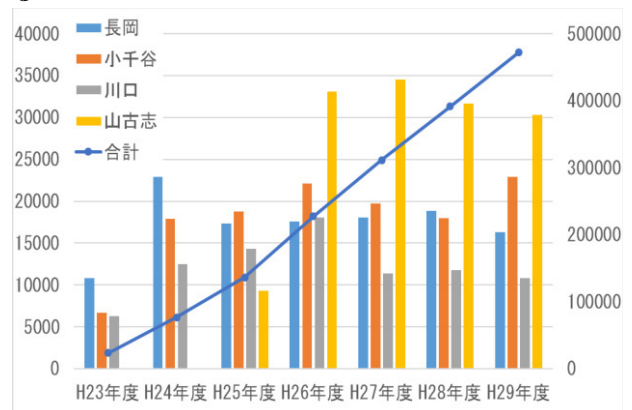


図 1 中越メモリアル回廊来館者数一覧

施設整備と 10 年間の事業費、運営費は「中越大震災復興基金」を原資とし、その後 5 年間で中越メモリアル回廊推進協議会（長岡市、小千谷市、公益社団法人中越防災安全推進機構）が引き継ぐことで計画されている。

平成 32 年度を持って復興基金からの予算処置が終了することを見据え、各館では自立運営の道を模索しながら事業計画が組まれている。有料の研修プログラムの提供や防災グッズの販売による事業収益の増収、学校防災教育支援や地域住民と来館者の交流スペースの充実により、市民から必要とされる施設運営を目指している。

### 3. おぢや震災ミュージアムそなえ館

#### (1) そなえ館来館者の傾向

平成 23 年 10 月にオープンしたそなえ館は、年間平均 19,000 人の来館者があり、平成 28 年 11 月に来館者 10 万人を達成した。その多くは研修や旅行を目的としたグループ・団体客であり、全体の 70% を占めている。個人客や 10 人以下のグループ（以下、一般来館者）は全体の 30% となっている。

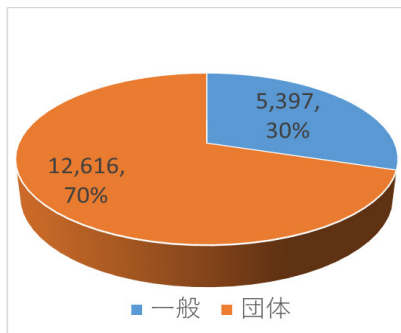


図2 平成28年度そなえ館来館者属性割合

しかし、昨年平成 29 年度に施設の一部リニューアルを行った以降、一般来館者の割合が徐々に増加傾向にある。これまで比較的数量の少なかった小千谷市内の家族連れ、一般来館者の増加がみられる。これは、今回のリニューアルによって最新の体感型地震動シミュレーターシステムを導入することで、全国的にも珍しい同システムを体験してみたいという小千谷市民および近隣市町村からの一般来館者が増えたことが理由として挙げられる。

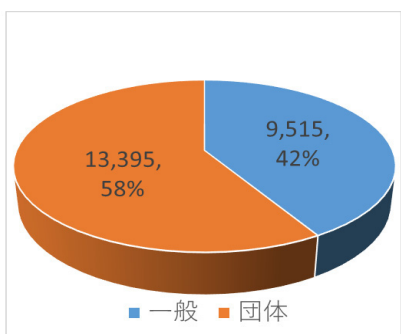


図3 平成29年度そなえ館来館者属性割合

#### (2) 団体来館者の概要

団体来館者層は埼玉県、東京都、群馬県といった関東自動車道等を利用して 2~3 時間程度で移動可能な関東圏からの利用が多く、1 日目をそなえ館での研修にあて、温泉に宿泊し 2 日目は観光施設をめぐり、帰路につくといったコースが定番となっている。

施設の係員による案内は無料で、さらに学びを深めたいという団体へは有料で研修プログラムを提供している。最も多いのが「地元語り部講話コース」で全体の 8 割を占めている。次いで「セミナー形式」、「ワークショップ形式」の研修が 2 割弱。年間 2、3 回ではあるが、オーダーメイド型の研修プログラムの要望もあり、その都度そなえ館スタッフと来館団体側担当者との事前調整のうえ当日のプログラムを作成、実施している。いずれの場合も、到着から出発までタイムスケジュールが決まっており、滞在時間はおよそ 90 分から 120 分で、見学と研修の時間に充てている。



図4 研修プログラム「語り部コース」体験の様子

#### (3) 一般来館者の概要

来館者数の約 4 割程度である個人、一般来館者は、地域、年齢層も様々で、ドライブのついでや、スタンプラリー参加者、知人の勧め、友達と遊ぶためといった理由をあげる人が多く、「防災を学ぶ」「備えを学ぶ」ことを目的とした来館目的をあげる人は少ない傾向にある。

そなえ館が一般来館者に提案している見学順路は、リニューアルで導入した MX4D の体験をした後、館内のクイズラリーに挑戦しながらの自由見学となる。平均 30~40 分程度の見学滞在時間となっている。

#### 4. そなえ館ジュニアサポーターの概要

そなえ館一般来館者の中で特徴的なのが「ジュニアサポーター」と呼ばれる近隣に住む子どもたちである。そなえ館では、「ジュニアサポーターズクラブ」を設置し、リピート来館する子どもたちを「ジュニアサポーター」として登録している。平成 25 年 5 月より活動が始まり、現在までに約 100 人の子どもたちが参加してきた。初代サポーターは現在中学 3 年生となる。中学校へ進学するととも学業が忙しくなり、ほとんどが来館しなくなり、主に小学校 4・5・6 年生がサポーターとして活動している。

そなえ館のジュニアサポーターとは、たびたび来館する子どもたちが施設見学だけでは時間を持て余している様子から、施設の運営やイベントにも協力してくれるよう頼んだことが始まりである。主なサポート内容としては、イベント開催時の受付、チラシ・ポスター等のモデル、展示メンテナンス（液状化実験装置の水交換）、防災グッズの袋詰めやダイレクトメールの発送準備、イベント前のモニター（クイズの難易度調査・工作にかかる時間計測）などである。

なお施設側は、いつ、どのタイミングで子どもたちが来館するかは把握していない。反対に、必ず手伝ってほしい仕事があるとは限らないため、子どもたちは来館した際に仕事があれば手伝い、なければ館内で思い思いに時間を過ごすことになる。

登録制といているが、名前を控えてサポーター用の名札を作成し着用してもらうのみで、各家庭からの承認を得てはいるわけではない。その代わりに、①必ず「そなえ館に行ってくる」と家族に伝えてからくること、②学校帰りに直接来館しないこと、という約束事項がある。

（事故、ケガの無いようスタッフも最善の注意を払って対応するが、万が一の際は各家庭で対処してもらうことを前提としている）

ジュニアサポーターが活動する際は必ずベストと名札

を着用し、手伝い、仕事をしているという意識を高める。活動終了後は名札の裏にシールを1枚ずつ張り付け、シールが10枚たまと防災グッズがもらえるなど、特典を用意し子どもたちを飽きさせない工夫を凝らしている。



図5 サポート回数に応じて名札の裏にシールを張る

## 5. ジュニアサポーターへのインタビュー調査

インタビュー調査は平成30年2月18日～4月14日の間、ジュニアサポーターおよびそなえ館スタッフの計11名に実施した。

多くはそなえ館から1キロ弱ほど離れたところにある小千谷市立小千谷小学校の児童であった。そのため、自宅からそなえ館までの移動手段も徒歩である。自宅からそなえ館までの距離があるサポーターは、自転車で来館する場合もある。移動時間は最長が徒歩30分程かけて来館するが、先に述べたように校区の子どもたちが主であり、バス、電車等公共交通を利用して来館することはない。



図6 ジュニアサポーター活動の様子（袋詰めの様子）

### (1) そなえ館来館状況

以下、そなえ館の来館に関する質問に対する回答をまとめて記述する。

質問1：初めてそなえ館に来たのはいつ、だれと来たか。

- ・保育園のころ祖父母に連れられて。
- ・保育園の運動会の後、母親に連れられて。
- ・小学校3年生の時、友達に誘われ。

質問2：いつ、どのくらいの頻度でそなえ館に来ているのか。

- ・授業が5時限目で終了する曜日には、大体そなえ館で遊んでいる。
- ・夏休みは週に3・4回は来ている。
- ・週1回程度、放課後。
- ・天気のいい休日は、そなえ館で遊んでいる。

- ・平日ならば学校の帰宅時間が早い日の放課後
- ・土日、春・夏・冬休み等、年間を通して来館するので、季節によって変動することはない。

質問3：誰と来るのか

- ・クラスが変わっても、引っ越しても、そなえ館と一緒に来るのはいつも同じ友達。
- ・家族とは来ない。妹（弟）と一緒に来ることはある。
- ・暇なときは一人で来ることもある。

質問4：家族全員、そなえ館に来たことがあるか

- ・父（または母）は、そなえ館のことを知っていると思うが、来たことない。
- ・家族全員で来たことはない。

### (2) 来館の要因

次に、ジュニアサポーターとしてそなえ館に来館する要因に関する質問と回答をまとめた。

質問5：どうしてそなえ館に来てくれるのか。

- ・手伝いをするとお菓子がもらえるから。
- ・遊び場所として楽しいから。
- ・家から近いから。
- ・何かしらやること（遊びや手伝い）があるから。
- ・暇なとき、サポーターの仕事をするために来る。

質問6：そなえ館で何をして過ごすのが楽しいか

- ・ジュニアサポーターのお仕事があれば、その手伝いをするのが優先。
- ・ない時は施設の中で遊んでいる。
- ・MX4Dが一番楽しい。いろいろな匂いがする。友達反応を見るのが楽しい。
- ・地震動シミュレーターの方が好き。MX4Dは怖くてもう乗りたくない。
- ・写真を見るのがいい。本当にあった時の写真なので怖いけど、なんだか見えてしまう。こんな風になるんだと思うけど、どうしても見えてしまう。
- ・「防災ジャングル」（そなえ館オリジナル防災イベント）への参加。
  - ・館内常設クイズの挑戦。
- ・展示室に設置されているベンチの一角でのおしゃべり。

### (3) 得られた学び

3点目は、そなえ館に来館することでどのような学びが得られたのか、または得られていないのかを問う質問に対する回答をまとめる。



図7 ジュニアサポーター活動の様子（屋外イベント）

質問7：中越地震のことを他の人に教えてあげられるか

- ・クラスの仲良しの友達だったらできる。
- ・（そなえ館に来たことのない）家族に教えてあげられると思う。

- ・そなえ館のスタッフのように教えてあげられない。防災の技術などは話せない。
- ・写真を見ながらであれば、そのまま説明すればいいのでできそう。
- ・自分は経験していないので無理だと思う。
- ・中越地震のことを知らないから教えられない。



図8 ジュニアサポーター活動の様子（広報用モデル）

#### (4) 子どもたちの変化

最後に、ジュニアサポーターズクラブが設立されてから5年が経過する中で、子どもたちに見られる変化はどのようなものがみられるか、そなえ館スタッフへのインタビュー内容をまとめる。

- ・兄、姉に連れられてきていたころは手伝いもうまくできず、周りで遊んでいるだけだった子どもが、数年後、サポーターとして来館するようになる。
- ・中学校へ進学するとサポーター活動に参加しなくなる。
- ・中学校へ進学した子どもたちが、自主的に声掛けをしてそなえ館で「サポーター同窓会」を開催した。
- ・任された役割に自信を持って取り組むサポーターもあり、イベント時などは自分よりも小さな子どもたちに対し、スタッフさながらの対応ができるようになった。
- ・お菓子がほしくて手伝いに来るのは相変わらず。

## 6. おわりに

ジュニアサポーターおよびそなえ館スタッフへのインタビュー調査より、サポーターとしてそなえ館へレポート来館する要因は次の4点が明らかとなった。

- ① 展示を見たり、おしゃべりしたり、時間を過ごせる、自分たちの居場所、遊び場だから。
- ② 手伝いをするとお菓子がもらえるから。
- ③ 体験装置がある、クイズができるから。
- ④ 距離的に集まりやすい場所にある。小千谷小学校に近いから。（信濃川をはさんで東側にある東小千谷小学校区の児童の登録はない。）

また、子どもたちはそなえ館に「遊び」に来くことを目的としており、サポーターとして手伝うことも遊びの1つとして捉えている。手伝うことがない時も、独自に楽しみを見つけ、館内で遊びに興じている。

つまり、そなえ館は「防災学習研修施設」だけではなく、小千谷市の子どもたちの居場所（遊び場）となり、スタッフとのやり取りやサポート業務に関わることでやりがいや充実感を得られる機会（学びの場）の提供も果たしていると考えられる。

そなえ館のコンセプトは「恩返し」である。支援に

対する恩返しに加え、震災経験のない地元の子どもの成長、学びを支える施設としても、運営側が考える学びの提供だけでなく、施設を活用する側（利用者）の自由な発想から様々な学びが得られるよう、柔軟な対応の継続が望まれる。

## 謝辞

本研究は、日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム（公募型研究テーマ）「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成を一部受けて実施された。

## 参考文献

- 1) 震災復興ビジョン策定懇話会：新潟県中越大地震復興ビジョン
- 2) 新潟県：新潟県中越大地震復興計画
- 3) 新潟県：中越大地震【前編】 - 雪が降る前に -
- 4) 公益社団法人中越防災安全推進機構：おちや震災ミュージアム「そなえ館」リニューアル計画資料
- 5) 筑波匡介：新潟県中越地震における震災遺構 - 中越メモリアル回廊山古志木籠について - ，災害・復興と資料第7号，新潟大学災害・復興科学研究所被災者支援研究グループ
- 6) 中越防災安全推進機構，復興プロセス研究会：中越地震から3800日